

2014年10月20日(月)東京説教塾 10月例会
説教分析・説教批評 担当：楠原彰子(日本基督団武山教会)

説教者：加藤さゆり

5 説教日：1980年8月24日

説教題：「主の任命」

聖書箇所：エゼキエル書第2章1-7節、使徒行伝第26章1-18節

聖書：口語訳聖書

10 ①テキストの言葉 ②聴き手の言葉 ③説教者の言葉 ④神の名による言葉
として下線を引いた

旧約聖書、エゼキエル書第2章1-7節

1 彼はわたしに言われた、「人の子よ、立ちあがれ、わたしはあなたに語ろう」。

15 2 そして彼がわたしに語られた時、霊がわたしのうちに入り、わたしを立ちあがらせた。
そして彼のわたしに語られるのを聞いた。

3 彼はわたしに言われた、「人の子よ、わたしはあなたをイスラエルの民、すなわちわたしにそむいた反逆の民につかわす。彼らもその先祖も、わたしにそむいて今日に及んでいる。

20 4 彼らは厚顔で強情な者たちである。わたしはあなたを彼らにつかわす。あなたは彼らに『主なる神はこう言われる』と言いなさい。

5 彼らは聞いても、拒んでも、(彼らは反逆の家だから)彼らの中に預言者がいたことを知るだろう。

6 人の子よ、彼らを恐れてはならない。彼らの言葉をも恐れてはならない。たといあざ
25 みといばらがあなたと一緒にあっても、またあなたが、さそりの中に住んでも、彼らの言葉を恐れてはならない。彼らの顔をはばかりてはならない。彼らは反逆の家である。

7 彼らが聞いても、拒んでも、あなたはただわたしの言葉を彼らに語らなければならない。彼らは反逆の家だから。

30 新約聖書、使徒行伝第26章。使徒行伝第26章1-18。

1 アグリッパはパウロに、「おまえ自身のことを話してもよい」と言った。そこでパウロは、手をさし伸べて、弁明をし始めた。

2 「アグリッパ王よ、ユダヤ人たちから訴えられているすべての事に関して、きょう、あなたの前で弁明することになったのは、わたしのしあわせに思うところであります。

35 3 あなたは、ユダヤ人のあらゆる慣例や問題を、よく知り抜いておられるかたですから、わたしの申すことを、寛大なお心で聞いていただきたいのです。

4 さて、わたしは若い時代には、初めから自国民の中で、またエルサレムで過ごしたのですが、そのころのわたしの生活ぶりは、ユダヤ人がみんなよく知っているところです。

5 彼らはわたしを初めから知っているのです、証言しようと思えばできるのですが、わた
40 しは、わたしたちの宗教の最も厳格な派にしたがって、パリサイ人としての生活をしていたのです。

6 今わたしは、神がわたしたちの先祖に約束なさった希望をいだいているために、裁判

を受けているのであります。

7 わたしたちの十二の部族は、夜昼、熱心に神に仕えて、その約束を得ようと望んでい
45 るのです。王よ、この希望のために、わたしはユダヤ人から訴えられています。

8 神が死人をよみがえらせるということが、あなたがたには、どうして信じられないこ
とと思えるのでしょうか。

9 わたし自身も、以前には、ナザレ人イエスの名に逆らって反対の行動をすべきだと、
思っていました。

50 10 そしてわたしは、それをエルサレムで敢行し、祭司長たちから権限を与えられて、多
くの聖徒たちを獄に閉じ込め、彼らが殺される時には、それに賛成の意を表しました。

11 それから、いたるところの会堂で、しばしば彼らを罰して、無理やりに神をけがす言
葉を言わせようとし、彼らに対してひどく荒れ狂い、ついに外国の町々にまで、迫害の
手をのばすに至りました。

55 12 こうして、わたしは、祭司長たちから権限と委任とを受けて、ダマスコに行ったので
すが、

13 王よ、その途中、真昼に、光が天からさして来るのを見ました。それは、太陽よりも、
もっと光り輝いて、わたしと同行者たちとをめぐり照しました。

14 わたしたちはみな地に倒れましたが、その時ヘブル語でわたしにこう呼びかける声を
60 聞きました、『サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。とげのあるむちをければ、
傷を負うだけである』。

15 そこで、わたしが『主よ、あなたはどなたですか』と尋ねると、主は言われた、『わ
たしは、あなたが迫害しているイエスである。』

16 さあ、起きあがって、自分の足で立ちなさい。わたしがあなたに現れたのは、あなた
65 がわたしに会った事と、あなたに現れて示そうとしている事とをあかしし、これを伝える
務に、あなたを任じるためである。

17 わたしは、この国民と異邦人との中から、あなたを救い出し、あらためてあなたを彼
らにつかわすが、

18 それは、彼らの目を開き、彼らをやみから光へ、悪魔の支配から神のみもとへ帰らせ、
70 また、彼らが罪のゆるしを得、わたしを信じる信仰によって、聖別された人々に加わる
ためである』。

(説教本文)

75 私たちはこのようにひとつの教会に集められて、ひとつの礼拝を守っておりますけれ
ども、必ずしも、お互いにそれぞれがどんな道をたどって信仰を与えられたかというよ
うなことについては、必ずしもお互いに十分良く知り合っているということではないと
思います。ときどき地区集会などで、そうしたお話をうかがう機会がありますけれども、
それもその人が歩んで来た長い人生から見れば、ごく一部分に限られたことであるよう
に思います。¹

80 ただ今、私どもがご一緒に読もうとしておりますこの使徒行伝の第26章は、今お読

1 説教者は、会衆の一人一人に対して、教会へと導かれたことを思い起こさせ、そこには、
様々な道があったことを認めるが、しかし、それは人生のほんの一部だという。短い導入
であるが、一人一人が導かれた道のりではなく、「誰があなたを導いたのか」と問が、会
衆に対してたてられている。

みいたしましたように、あの使徒パウロのまことに劇的な回心の物語であります。しかし大変興味がありますことに、パウロ自身は、自分のそうした回心の出来事について触れることは、まことに驚くべく少ないと言って良いと思います。ガラテヤ人への手紙だとか、ピリピ人への手紙などにその一部を見ることができますけれども、今私どもが読
85 みましたような形で、自分の回心をパウロが語っているというところはございません。そしてこの使徒行伝というのは、ご承知の通りに、ルカによる福音書を書きましたあのルカの筆になるものです。そしてこの使徒行伝の中にはこのルカによって3回にわたって、このパウロの回心の出来事が、回心の物語が書かれております。9章、22章、そして今日の26章と3回、ルカはパウロの回心を書いております。しかしそれぞれを讀
90 み比べてみますと、ルカは、そのパウロが置かれております状況だとか、あるいはパウロが語りかけます相手によって、多少の違いをこのルカは書きながら、しかし大筋においてはこのパウロの回心の出来事を、今申しましたようにルカが3回も書いているという
95 ことを、私たちは使徒行伝で読みながら、しかしさつき触れましたようにパウロ自身は、そのことに触れることは非常に少なかったということを心に留めながら、この出来
95 事をご一緒に読んでまいりたいと思います。²
26章の9節から読んでまいります。

わたし自身も、以前には、ナザレ人イエスの名に逆らって反対の行動をすべきだと、思っていました。

100

とパウロは言っています。信仰を与えられる前のパウロは、「わたし自身も」と書いておりますけれども、これはもう少しもとの言葉ですと「私は、私自身」「この私は私自身」というように、「私」という言葉が大変強調されておまして、「この私は私自身、こう
105 すべきだと考えていました」。そして、どうすべきであると考えていたかと言うと、「ナザレ人イエスの名に逆らって反対の行動をすべきだと、私は、私自身考えていた」とパウロは言っています。そしてある人は「私は、私自身、自分の思い込みで」というように
105 に意識をしておられるほどに、ここでパウロが考えていたことは、パウロ自身が、自分
105 はこうすべきことであると考えていたことだ、ということだと思えます。

パウロ自身、5節のところにありますように、「わたしたちの宗教の最も厳格な派にした
110 がって、パリサイ人としての生活をしていた」とパウロが言っていますけれども、パウロ自身、まことに熱心なパリサイ人でありました。パリサイ人というのはご承知の通り、律法を重んじ、律法に生きること、そのことを何よりも第一のことと考えていました。そしてパウロは自分がそのように生きていたときに、律法によってではなく、この
115 ナザレ人イエスを信じる信仰によって生かされている、そういう人々の群れのあること
115 を見たときに、自分と相容れない生き方に対し、律法を重んじないその人びとの生き方
115 に対し、これは神を冒瀆するものだ。自分自身の生き方に相容れない生き方に対して、彼はこれらの生き方を、それらの人々を殲滅すべきだと考えた、とパウロは書いていま
115 す。

信仰の熱心というものは、宗教家の熱心というものは、往々にしてこういう形を取る
120 ということ、私たちはここに見ることができると思うのです。自分がそのことに対し

2「誰があなたを導いたのか」という問に対して、説教者は、今日のテキストに登場するパウロから、もう一度問い直す。説教者は、会衆の関心をパウロの回心の出来事そのものではなく、誰がパウロを導いたかに向けさせている。

て非常に熱心であること、そこに生き抜いているとき、自分は自分自身こうすべきであると考えて、それで自分を律している場合は良いのですけれども、必ずそういう宗教家の熱心というものは、それが他者に及んで行くものだと思うのです。そして他者もまた自分とまったく同じように、かく生きるべきだと考えて、そして自分自身と同じように生きていない者に対して、いつでもそうすべきであるということにおいて、その人びとを圧迫するということが起こってくると思うのです。

律法主義あるいは伝統主義、律法に生きるとか、あるいは伝統に生きるということの中で、人間というものは、だんだんだんだんとその中で、自分がそのように生きているということで、自分自身が重みを増していってしまいます。そしてそうでない人びとに対して、パウロ自身が言っていますように、11節のところで「彼らに対してひどく荒れ狂い」と書いてありますように、人びとを獄に閉じ込め、彼らが殺されるときには賛成の意を表し、そして自分がひどく荒れ狂ったと書いています。これは実に恐るべきことだと思うのです。自分自身がかくすべきだ、そしてそれが他者に向かって行ったとき、他者もまた、かく生きるべきだと言って、そのように生きていない人に対してその人は荒々しくなっていく。他者を切り捨てていく。聖徒を獄に閉じ込め、彼らが殺される時、それに賛成をしたとパウロは言います。³

そしてそのパウロの熱心は今申しましたように、キリストを信じる聖徒の群れを迫害することにおいてその熱心さが現れました。そしてついに、彼は祭司長たちから権限と委任とを受けて、ダマスコに向かって聖徒の群れを迫害するために出かけてまいりました。

しかし、そのパウロを天からの強い光が、太陽よりももっと強い光が照り輝いて、パウロ自身をめぐり照らし、そしてパウロは地に倒れたと聖書は記しています。使徒行伝の9章はこのパウロの姿を、聖徒に対する殺意に息を弾ませてダマスコに向かった、と書いています。人に対する、信仰の熱心のゆえに殺意を抱いて迫害に向かったパウロを、十字架につけられ、お甦りになった主イエス・キリストがそのパウロの途上に立ちはだかって、パウロの行く手を遮られました。パウロはその光のもとに地に打ち倒されたときに、パウロは声を聞きました。⁴

3 説教者は、回心前のパウロがどのような人物であったかを、聖書を引用しながら紹介する。同時に、単なる聖書の引用だけで、それは終わっていない。119行目から、説教者は、「宗教家の熱心というものは…」といいながら、すでに信仰者であるものにとっても、未だ求道者であるものにとっても、「熱心」が生み出す、神の現実を見えなくしている事実を示している。

この説教者の一つの特徴は、聖書の言葉をパラフレーズしながら、会衆をみ言葉の世界の引きずり込んでしまう巧みさではないかと思う。127行目から、律法主義のもたらすものを述べているように聞こえるが、内容は、パウロの生きた時代の律法主義にとどまっていない。言葉の上では「人間というものは…」と一般化された表現によって、会衆一人ひとりの中の律法主義、隣人を顧みない熱心が問われているように見えるが、説教者は、単に一般化したのではなく、より、日常の言葉でパウロの律法主義、伝統主義を説きながら、それが私たちの中にもあることを会衆に気づかせているのではないか。

4 13節の言葉が、そのまま用いられているが、パウロの回心が「光」の中で起きたというのは、重要なイメージである。しかも、この光がパウロの行く手を遮り、地に打ち倒し、と動的に働く光として登場する。パウロの行く道を180度回転させたものの、一つの姿が描き出されていると思う。

サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。〈14節〉

150

主イエスはここで、ご自分を信じる聖徒の群れが迫害のもとにあるときに、その迫害の中に苦しんでいるその弟子たちを、その聖徒の群れを、サウロに向かって、なぜわたしの信徒の群れを迫害するのか、とお呼びかけにならないで、主は、「なぜわたしを迫害するのか」とサウロに申されました。主を信じる信仰のゆえに厳しい迫害の中に命の危険を冒して、なおその信仰を守り抜いているその人々を、主イエスは「わたし」とお呼びになっておられます。かくまでも迫害のもとにある聖徒の群れの傍らに、主が立っておられる、身を置いてくださる。いやむしろ、もっと主イエス・キリストがその迫害の中にある人々のご自身をひとつにして、「なぜわたしを迫害するのか」とパウロに、サウロに、主イエスは仰せになりました。

160 この言葉を聞いたときに、この光に照らされたときに、サウロは、

主よ、あなたはどなたですか。(15節)

と尋ねました。サウロがここで、光の中におられる主イエスを、「主」と呼んでおる、そのことから、ある人びとは、パウロの中に、この劇的なパウロの回心、それに先立って既に、パウロの心の中に主イエス・キリストに対する何か芽生えていたと、そのように推測することができるのではないかと述べています。確かにパウロはそれまで多くのキリスト教徒に触れてまいりました。自分の激しい迫害に、殺意に耐えて、信仰を守り抜いていく。そういう信徒の群れの姿を、彼自身、目の当たり見てまいりました。あのステパノの殉教のときも、サウロは立ち会っていた、と述べていますように。そうした事柄の中で、既にパウロの心の中に、信ずる者の、その信仰に触れながら、何か備えられていたと、そういう推測というもの成り立つのではないかとある人たちは言うのです。

確かに、人間が主イエス・キリストの救いにあずかるまでは、それぞれに違った心の旅路というものがあったと思うのです。その長さにおいても、またその姿においても、さまざまであったと思います。ある人は長く、ある人はまことに短い期間に、そうした信仰が与えられたという経験があると思います。ある人の中にはまことに深い渇きや飢えがあったと思います。しかし、私たちは、パウロ自身が、それでは自分が信仰が与えられる前の自分をどのように見ていたか。そのことを見てみたいと思うのです。⁵

180 ピリピ人への手紙の第3章、311ページ。ピリピ人への手紙の第3章4節から読んでみます。311ページ。

5 自分の行動を遮る存在としての光に、「あなたはどなたですか」というパウロの問が響く。パウロが「主」と呼びかけているところから、それまでにてあっていたキリスト者から、パウロにすでに、信仰の備えがあったのではないかという説を紹介する。

説教者は、ここで、丁寧な議論を重ねているが、それは、あくまで、私たち一人一人が、主イエス・キリストと出会うことから、そして、主イエスによって変えられるところから、信仰が始まるからである。確かに、キリスト者に出会ったことが、入信のきっかけになることは大いにあるけれども、それが重要なことではなく、主イエスとの直接の出会いが最も重要なことなのである。

説教者は、それを示すために、さらに、聖書の他の箇所からパウロの言葉を引用する。

もとより、肉の頼みなら、わたしにも無くはない。もし、だれかほかの人が肉を頼みとされていると言うなら、わたしはそれをもっと頼みとされている。わたしは8日目に割礼を受けた者、イスラエルの民族に属する者、ベニヤミン族の出身、ヘブライ人の中のヘブライ人、律法の上ではパリサイ人、熱心の点では教会の迫害者、律法の義については落ち度のない者である。しかし、わたしにとって益であったこれらのものを、キリストのゆえに損と思うようになった。(4-7節)

185 と書いてあります。このパウロの言葉を読みますと、パウロ自身が律法の生活を守ることの中で、その律法の持っている高い理想と、そしてその律法を守り得ない自分の無力さというものを嘆いているというような、パウロ自身の中に何か内的な挫折があったというようなことをパウロ自身書いていません。むしろ自分はパリサイ人の中のパリサイ人、熱心の点では教会の迫害者、律法の義については落ち度のない者であったと、パウロ自身書いています。ですから私たちはここで必ずしも、パウロの心の中に既に主イエスを主と呼ぶような何か備えが、徐々になされていたというようなことについて、必ずしもそれを重んじる、それを大切に考える必要はない。そういうパウロの心理状態を詮索する必要はまったくないのではないかと思うのです。

190 そして、むしろここでは、律法の誇りに生きていた、自分は落度のない者だと言って
200 いた、あのパウロ自身を、この甦って光の中に現れてくださった主イエス・キリストご自身が、このパウロを地に打ち伏させたということだと思うのです。これはまったく神のみわががここに現れたということだと思うのです。パウロの場合には、今申しましたように、律法のわざに誇りをさえ持っていたこの熱心なパリサイ人を、教会を迫害することをもって自分の熱心の証しとしていたこのパウロを、主ご自身が捕えてくださった
205 ということだと思います。神のみわががそこに現れたということです。⁶

そしてこのことは、先ほども申しましたように、私たち自身がそうでありましたように、主が捕えてくださいますまでに、自分が辿ってまいりました、あの惨めな、あの貧しい、あの暗い、あの渴き、あの苦悩、そうしたものが、主イエスに、私たちを導くものであったというような、そういう経験を私たちはそれぞれに持っていると思うのです
210 けれども、しかしそれとでも、私たちの悲惨が、私たちの苦悩が、それ自身、キリストに私たちを出会わせてくださったということではなくって、そういう中にある者に主が出会ってくださった。主がこの私を捕えてくださったということにおいては、まったくこの熱心なパリサイ人パウロを地に打ち倒したように、そこに神のみわがが現れたと同じように、私たち一人ひとりの救いというものはどのひとつをとっても、あり得べから
215 ざるところに神のみわがが現れた。それはまったく主の憐み以外にはないと言い得ることができると思うのです。誰をとっても、それは奇跡と言う以外にはないのではないかと

6 説教者は、説教テキストの言葉をもう一度ここで引用しながら、さらに、はっきりと、パウロの回心が、ここで主イエス・キリストと出会ったことによって起こったことを示す。そして、ここにこそ「神のみわががあらわれた」と示す。

思うのです。⁷

そして今、甦られた主は、この自分を迫害する熱心なパリサイ人サウロを捕えて、ご自分のご用のためにお用いになろうとしておられます。

220 地に倒れているサウロに向かって主は、

さあ、起きあがって、自分の足で立ちなさい。(16節)

と仰せになりました。

225 ここで「立つ」という言葉が使われております。⁸ 先ほども、エゼキエル書の2章を読みました。預言者エゼキエルの召命の出来事です。その中で主は繰り返し「立ちなさい」。語られております。そしてこの「立つ」という言葉は、主は私たちに、主の使命をお与えになるとき、主の委託をお与えになるとき、この「立ちなさい」、そういう言葉をもって私たちにその課題を、その使命を、その任務を、お与えになる。そういう言葉で
230 す。「さあ、立ちなさい」。この「さあ、立ちなさい」というように訳されております。「さあ」という言葉は、その通り、今申しましたように、何か命令を与える、そういうときにその前に使われて、「さあ」というように訳されている言葉ですけれども、また別の意味は、「しかし」という言葉です。「しかし、立ちなさい」。

自分の信徒の群れを迫害するパウロの前に立たれた主イエスが、その迫害に対して、
235 報復するためではなく、そのサウロを裁くためではなく、むしろそのサウロを招くために主が、今お立ちになっておられる。サウロ自身、自分が数々加えてきたあの迫害のゆえに、その迫害を加えた主によって打ち砕かれても当然であるべき、そのサウロに向かって、主は報復されるためでもなく、裁くためでもなく、招くために現れてくださった。
「しかし、立ちなさい」。

240 「しかし、立ちなさい」。そう主はパウロに語られました。9章のパウロの回心の出来事を読んでみますと、パウロがこの強い光に当たったときに、目が見えなくなった。その見えなくなった目を、主はアナニアという人に祈りの中に語られまして、サウロの目を開いてやるようにとアナニアにお語りになりました。そのときアナニアは主に向かって、あのサウロという男がどんなに酷いことをしたかということをし上げました。その
245 のとき、アナニアに向かって、主は、しかし、サウロをわたしがわたしの器として選んだのだとアナニアに申されました。サウロに対する人間の評価がどのようなものであっても、主は、しかし、わたしが、わたしの器として、わたしが選んだのだと仰せになりました。そして今、サウロに向かって、打ち倒れているサウロに向かって、わたしはあなたを招くために来たのだ。裁くためではない。立ちなさい。さあ、立ちなさい。そ

7 説教者は、もう一つの課題として、私たちが人生の中で出会う、苦悩の原因についても言及する。というのも、先のキリスト者との出会いと同様に、人生の中で出会う、試練、苦悩というものが、私たちが信仰に導いていくという考えがあるからであろう。しかし、ここにおいても大切なのは、211行目「そういう中にある者に主が出会ってくださった。主がこの私を捕えてくださったということにおいては、まったくこの熱心なパリサイ人パウロを地に打ち倒したように、そこに神のみわざが現れたと同じ」ということである。説教者は、終始一貫して、パウロと出会ってくださった主イエスが、私ども一人一人とも出会ってくださることを指し示している。

8 ここからは、救われたものの生活について、説教者は語り出す。ここでの重要な鍵の言葉は、「立つ」であろう。

250 う仰せになってくださいました。⁹

もう一か所開けていただきたい聖書の箇所があります。三二七ページ、テモテへの第一の手紙の第一章一二節。三二七ページ。テモテへの第一の手紙の第一章一二節。

わたしは、自分を強くして下さったわたしたちの主キリスト・イエスに感謝する。
255 主はわたしを忠実な者と見て、この務に任じて下さったのである。わたしは以前には、神をそしる者、迫害する者、不遜な者であった。〈12-13節〉

そう書いています。ここでパウロが「主はわたしを忠実な者と見て」と書いてありますこの「見て」という言葉は、忠実な者と「見なして」という言葉です。忠実な者と見な
260 して下さった。忠実な者と考えて下さった。もっと強く言いますと、この言葉は、「信じる」という言葉ですから、「私を忠実な者と、主イエスが信じて、私をこの任に立たせて下さったのだ」とパウロは言っています。

人がどのように自分を見ても、そして人よりも何よりも、自分自身が、どんなに恥ずべき、捨てられるべき存在であるかということ、私たちは自分自身が一番良く知っています。しかし、そういう私たちを、主があパウロを忠実な者と見なして下さった
265 ように、この私たち一人ひとりも、主が忠実な者と見てくださる。そういう者と見なしてくださる。そういう者だと主が考えていてくださる。忠実な者だと主が信じてくださる。いったいこの主の憐みのまなざしの中で、私たちは人を恐れることもなく、自分は自分を捨てることはなく、この主が、見なして下さるそのまなざしの中で、もう
270 一度、確かに、立つことができるのではないかと思うのです。

主がパウロに現れてくださる。「さあ、立ちなさい」。なぜ、わたしはあなたに会ったか。なぜ、わたしはあなたに出会ったかということ、わたしがあなたに現れたのは、わたしがあなたを僕とし、証人とするためである。そしてその僕と、証人とせられた者は、
275 自分に主が会って下さったこと、そして主がすべての者になして下さるということ
を証しする者として立たせるために、わたしはあなたに出会ったのだ、と主イエスが語られました。あなたをわたしの僕とするために、あなたをわたしの証人とするために、わたしはあなたに現れたのだと主が仰せになりました。

そして、興味がありますことに、「さあ、立ちなさい」と言うだけではなくて、「さあ、自分の足で立ちなさい」と書いています。自分の足で立つ。そして自分の足で立つ
280 ということが、このパウロに現れて下さった、主が捕えて下さって、わたしの証人となり、わたしの僕として下さるために、わたしがあなたに現れたのだとおっしゃる
ように、私たち一人ひとり、主イエス・キリストの僕になるということ、主イエス・キリストの救いのわざを、証しする者として立つということが、とりもなおさず、私た

9 この短い段落の中に「立ちなさい」という言葉が連続して現れる。そして、それは、会衆一人一人にとっての励ましの言葉として響きだしているように思える。説教者がここで読み取ったのは、「立て」という命令ではない。「さあ、立ちなさい」「しかし、立ちなさい」の中に、主イエスの招きの言葉を聞いたのである。おもしろいと感じたのは、ここでは、説教者は余計な解説を加えずに語っていることである。これが招きであり、召しであることは、アナニアへの言葉において示し、説教者は、さらに次の段階へ話を進める。

ち自身が自分の足で立つということだと聖書が言っています。¹⁰

285 私たちの生活の基盤というものが、主が与えてくださった、その目的の中で、その召命の出来事の中で、しっかりと私たちの生きる足場が定まったということだと言うのです。自分の足で立つ。私たちは一人ひとり置かれている場所が違っています。しかし、その違っているところで主イエスは「さあ、そこで、自分の足で立ちなさい。そこであな

290 そしてパウロに対して、17節のところで、

あなたを救い出し、あらためてあなたを彼らにつかわす。

私たちが生かされるということは、私たちが救い出されて来たその場に、もう一度改めて遣わされることだと言うのです。自分が救われてきた、そこに私たちが改めて、主の証人として、主の僕として、そこに遣わされて行くことだと言うのです。そしてその遣わされて行って、何を宣べ伝えるのか。何をするのか。

彼らの目を開き、彼らをやみから光へ、悪魔の支配から神のみもとへ帰らせ、また、彼らが罪のゆるしを得、わたしを信じる信仰によって、聖別された人々に加わるため
300 である。(18節)

私たちの目が開ける。今まで見えなかったことが見えてくる。カール・バルトは、このパウロの回心の出来事をこのように書いておられます。「私が立っていた高みとは、深みのことであった。私がその中で生きていた安全さとは、破滅のことであった。私が持っていた光明とは、暗黒のことであった」。自分が律法の誉れの中で、高みに立っていると思った。その高みは、今目が開けて見たときに、それはまことに深い深みの中に自分が落ち込んでいたことであった。私が律法の義によって生きていた安全さというものは、それは破滅のことであった。自分が持っていたあの榮譽、あの光明とは、暗黒のことであった。そしてそのことを、自分の体験をもって知らされたパウロが、今そのことを携えて、自分が救い出された、その光明の中に生きていると思っているもの、安全の中に生きていると思っているもの、高みの中に自分たちは生きているのだと思っている、そういう中に自分自身が改めて遣わされて行って、そしてこのことを証しするのだと。そのためにパウロは、今立たされているのだと言うのです。

そして律法の義によるのではなく、私たちのために、十字架に架かってくださり、そ

10「立つ」という鍵の言葉が、ここではさらに「自分の足で立つ」に発展していく。これは大変興味深い。というのも、一般に信仰を持つというと、自分の足で立つのではなく、神様に頼っていくという、安易なイメージに、私たちは支配されることが多いからである。しかし、ここで説教者が示しているのは、何かにすがって立つことでも、自分の力に頼って自分の足で立つことでもない。283行目「私たち一人ひとは、主イエス・キリストの僕になるということ、主イエス・キリストの救いのわざを、証しする者として立つということが、とりもなおさず、私たち自身が自分の足で立つということだと聖書が言っています。」

11 信仰じゃ、一人一人の歩みや今の立ち位置に、様々な違いのあることが、ここで、信仰のして区から新たに位置づけられる。説教の冒頭で、それぞれが違う道筋によって導かれた、という事実だけに目をとめるのではなく、一人一人を導いてくださった主イエスによって、新たに意味づけられているのではないか。

315 の甦りによって、そのイエスを信じる、その信仰によって、罪の赦しを得て、そして聖徒の群れの中に、聖徒の交わりの中に入れられたパウロが、そのことを携えて、人びとの中に遣わされて行くというのです。高みが深みであった。安全が破滅であった。光明であったものが、むしろ暗い闇であった。そして新しい光の中に救い入れられたとき、パウロが見ることができた世界っていうものが、そこで新しい世界が開けて来ました。

320 古きは既に過ぎ去った。見よ、新しくなった。あの迫害の中に息を弾ませていたパウロが、聖徒の交わりの中に入れられたと言うのです。

ある小さな本で、こういうことを教えられました。この「迫害する」という言葉と、パウロがピリピ書だとか、あるいはコリント人への第一の手紙の14章の1節で、「愛を追い求めなさい。真理を追い求める」という、この愛を「追い求める」という言葉と、
325 「迫害をする」という言葉とはまったく同じ言葉だというのです。改めて教えられて辞書を引いてみました。その通りでした。「迫害をする」という言葉。その言葉と愛を「追い求める」という言葉がまったく同じ言葉が使われている。真理を「追い求める」。それとまったく同じ言葉が使われている。そして、パウロがピリピ書の3章のところで、まだ自分が得たと思っていない、手を伸ばして、それを追い求めているのだと言ったとき
330 に、その追い求めるという言葉を使ったとき、そしてまた、コリントの教会に、愛を追い求めなさいという言葉を書き送ったときに、その言葉と、自分があの、教会を迫害してきたというその言葉がまったく同じ言葉だということにおいて、自分がどんな者であったかということ、そして光の中に生かされている自分が、今はどのように生かされている者だということを知ったのではないかと思うのです。¹²

335 そして、そのパウロを主は、忠実な者と見なして、この任に自分を立ててくださったのだという、このパウロの、この主の恩顧の、この顧みの、畏れ多さ。かたじけなさ。そこにパウロは生涯、立ち続けたと思うのです。

そして、私たちもまたまことに小さな者です。そして誰よりもまた、自分が欠けの多い、力のない、そしてまことに恥に満ちたものだということを、伝道においては怠惰で
340 あり、愛においても欠ける者であることを、誰よりもよく承知している私たちを、同じようにパウロを忠実な者と見なして、ご自分の使命に立たせてくださった、あの甦りの主が、私たちをもまた忠実な者と見なして、主のご用に、その任に立たせていてくださる。そのことに私たちは堅く立っていきたいと思うのです。

もう何年も前になります。東京におりました頃、教会の大変年を取られました方が、
345 病気が重いということで、病院にお見舞いにまいりました。そうしますと、その病人の枕辺に、聖書が開いたまま置いてありました。何気なくその聖書の箇所を見ましたときに、その開かれている聖書の箇所が使徒行伝であったということに、私は大変驚きを覚え
ました。自分がもう年を取って重い病の床にあるときに読む聖書の箇所は、ある人にとっては、それが詩篇の詩であるとか、いろいろなところが考えられると思うのです
350 けれども。その人は、読みさしにおいてあった聖書が、使徒行伝であった。使徒行伝は、またの名を「聖霊行伝」というように呼ばれていると言われます。使徒を、名のある使徒も、名のない使徒も、名もない弟子も、小さな者も、この聖霊が揺り動かし、聖霊が

12 ここでも、大変興味深いのは、「迫害する」と「愛を追い求める」という言葉の解説が、単なる解説に終わっていないことである。説教者は、説教の冒頭で、宗教家の熱心、パウロの熱心は、熱心を向ける方向が違っていることを指し示し、そこに、神には向かう人間の罪の姿を示していた。しかし、ここでは、その「熱心」さえも180度、「愛を追い求める熱心」ひっくり返されているのである。

働いて、聖霊が立たせ、聖霊が遣わすままに、一人ひとりが主のご用に立った。そして教会のわざが、全世界に広まって行く。その聖霊行伝と言われる使徒行伝を、病の床に
355 ある、年老いた一人の婦人が、どういう思いで使徒行伝を読んでいたのだろうか。そのことについては何もご本人から聞く機会はありませんでした。

しかし、もしもそのように想像することが許されるならば、証しをするということは、言葉をもって証しをする。わざをもって証しをする。しかし、それと同時に、その人がそこに遣わされている、そこに置かれている場所で生きているという、存在それ自体が
360 ひとつの証しだと思うのです。寝たままに何の伝道ができるのか。そうではなくて、その人が、自分が病床に遣わされている、自分がここに「立ちなさい」と、置かれている場所だと、その人は理解をしていたに違いない。そして聖霊が導くままに、使徒が、弟子たちが、教会が、伝道を押し進めて行く。そのわざの中にこの自分も巻き込まれているのだ。床の中に病んだままに病みながら、床に就きながら、なおそこに自分が生きて
365 いるのだと、そういう思いで使徒行伝を読んでいたのだと、そう理解して良いのではないか。¹³

私たちもまた、遣わされているところはさまざまです。その力においても、私たちは違っています。何よりも、自分の無力を嘆かなければならない私たちは、「しかし、自分の足で立ちなさい」、そうサウロを立たしめてくださった主が、今私たち一人ひとりに同
370 じ言葉を語りかけていてくださる。忠実な者と見なしていてくださる。その主のまなざしの中で、もう一度新しく立って、私たちが遣わされるところに、出て行きたいと思えます。

お祈りをいたします。

375 父なる神さま。闇の中にいながら、本当に自分の闇の姿が分からなかったときに、あなたは、この取るに足りない小さな者を、あなたのみ心に留めてくださり、あの主イエス・キリストの贖いとその甦りのわざを通して、私たちを救い出し、悪の力から神のもとに、闇の世界から光の世界へと移し変えてくださりました。そして繰り返し犯します罪にもかかわらず、なお主はその赦しと憐みのゆえに、私たちをご用のために立たせて
380 くださいますことを感謝いたします。どうぞ一人ひとりが、そしてこの教会が、その主の顧みの中にしっかりと立つことができますように。

13 説教者は、み言葉に生かされた一人の信仰者の姿をここに例話値して語る。ここでも、注目したいのは、紹介された信仰者が主人公ではなく、その病床に伏している信仰者を立たせている、主イエス・キリストが明確に語られていることであろう。

主イエス・キリストのみ名によってお祈りいたします。アーメン。¹⁴

14 この説教は、1980年8月24日に鎌倉雪ノ下教会で語られたものである。筆者は、その1ヶ月前に初めて鎌倉雪ノ下教会の門をくぐった。だから、求道1ヶ月目で耳にした説教と言える。もちろん、34年も前のことなので、詳細が記憶に残っているわけではない。ただ、今回、改めて録音を耳にして、思い出したのは、この教会に通い続ける決心をしたのは、聖書そのものに向かう心を説教によって整えられたのと、礼拝のすべてが、特に、最前列でみ言葉を聞く長老の姿が、礼拝において、何を聴き取り、誰に出会うかを示していたからだと思う。

そしてこの説教者の一番の特徴は、聖書の世界の中に、会衆を自然に連れて行く力であろう。説教を聞いて、もう一度、この教会に来てみたいと思うのはもちろんのこと、聖書をもっと読んでみたいという思いを起こさせるのである。私は、この説教者の言葉づかいは、説教をするものはもちろんのこと、特に、教会学校の教師として奉仕する方たちにも身につけてほしいと思い、実際、武山教会の教師会でも紹介した。